

大元ウルスの都城空間と王権儀礼をめぐって

— 宋遼金都城と元大都の比較史的研究の試み*

久保田和男**

The Spatial Structure of the Capital of the Great Yuan Empire and Kingship Rites

KUBOTA Kazuo

This article compares the capital cities of the Liao and Jin with Dadu 大都 of the Yuan dynasty and examines distinctive features of Dadu's spatial structure as a capital city. The key to the comparison is kingship rites, or rites associated with regal authority. Capital cities on China's Central Plain were places for performing Confucian rites. The Liao, Jin, and Yuan each captured Kaifeng 開封. When doing so, they assimilated the culture of the Central Plain, but the way in which they did so differed. In particular, changes can be seen in the spatial structure of their capital cities, depending on the extent to which they adopted the suburban sacrifice (*jiaosi* 郊祀), which functioned as a kingship rite on the Central Plain. The spatial structure of Dadu was similar to that of capital cities on the Central Plain, but Kublai Khan did not perform the suburban sacrifice, and instead he performed kingship rites that derived from Tibetan Buddhism and shamanism. Making use of this fact, I clarify characteristics of Dadu's spatial structure as a capital city.

キーワード：郊祀，大都，チベット仏教，比較都城史，大元ウルス，クビライ

はじめに

儒教国家においては、都城で郊祀（南郊）を行うことが、天（昊天上帝）からの王権の委託を可視化する儀礼として重要であった。郊祀をおこなうために普通の都市とは異なる都城空間の構造が定式化したのである。郊祀が本格的に継続して行われるようになったのは、儒教国家が確立した後漢からである。後漢は洛陽に遷都するが、それは、前漢の長安が郊祀挙行にはふさわしくない平面プランだったことが理由の一つとして考えられている。後漢洛陽において南郊壇が設けられ、南郊に向けての中軸線街路が宮殿から整備される。これが中国都城の基本的なスタイルとなる。つまり南郊儀礼は、都城全体のプランを形成する。これは前漢の長安から、後漢が洛陽に遷都して、宮城から南郊にいたる方向に都城を作り替えたことから始まる。

「方九里、旁三門。國中九經九緯、經涂九軌。左祖右社。面朝後市、市朝一夫。」という『周礼』考

工記、匠人營国の条が中国都城の理念として言及される。しかし、南北中軸線街路や郊壇も中国都城には必備の設備である。太廟では、南郊儀礼に際して、南郊に向かう前に皇帝が一晩過ごして、祖先神に天への祭礼実行を報告する。したがって、「考工記」の記述と、南郊・中軸線街路を組み合わせた都城が、中国都城の理念型となっていたのである。宮城の端門、皇城正南門（朱雀門）を経て国城正南門にいたる南北中軸線街路とその先に南郊壇をもつ平面プランなのである。北魏の洛陽や唐の長安、北宋の開封はそのような視点から見れば同様なコンセプトを持った都城である。

さらに唐宋変革後の開封では、皇帝と都人のコミュニケーション（「与民同楽」）を図る目的から、中軸線街路に両脇に千歩廊というこれまでにない公共空間が設けられた。これは都城の新しいコンセプトであり、清の北京に至るまでの「近世」の都城に受け継がれていった。

遼金元の各王朝は「征服王朝」という性格から都城を建設している。そこで南郊などの郊祀がどのように行われたのかは、中国都城のスタイルを本質的に受け入れたのかを考える試金石となろう。なお、

* 2018年3月11日 第18回遼金西夏史研究会大会にて報告

** 一般科教授

原稿受付 2019年6月20日

遼金元の都城は唐宋変革後の都城であり、開封からの影響を受けている面があり千歩廊が設置されている。

大都については、『周礼』考工記からの影響について強調する研究が多かったようである。しかし、南北中軸線街路や千歩廊という都城空間構造が大都でも用いられているのである。特に千歩廊は大規模な祝祭となった南郊祭祀や「与民同楽」ともいわれる北宋の政治文化を反映したものであった。そこに開封と大都の都城空間を比較して考える新しい可能性があると考えるのである。

筆者は近年、遼金の都城について、北宋開封からの影響を考えてきた¹⁾。本稿ではその成果を受けて、まず郊祀との関わりによって遼から金を経て元に至るまでの一連の都城史として捉える視点を提示する。その方法として以下のような論点を用いてみたい。

宋の都城開封・臨安は契丹・金・元により陥落・占領されている。その際、人的な資源をはじめとして書籍・文物、礼制に関する物資が征服者によって北方に持ち去られている。これらの文化財をどのように征服王朝が利用したのであるか。この問題については美術史の世界などでも注目されている重要な問題であるが²⁾、本稿はまず都城史の観点からこの問題を比較検討する。そのうえで、元の上都・大都における多彩な王権儀礼の中に占める郊祀の位置を考え、大元ウルスの都城空間の王権論的な意義を考える。

1 遼の都城における郊祀の不在

a 上京臨瀆府における郊祀の不在

遼は 946-7 年に、後晋の開封を陥落させ華北を占拠する。「打草穀」への中原庶民の反発から、早期に契丹軍は引き上げることになるが、その際に開封から人的資源と物資を持ち去っている。『遼史』には、

晋諸司僚吏、嬪御、宦寺、方技、百工、図籍、曆象、石經、銅人、明堂刻漏、太常樂譜、諸宮鼎、鹵簿法物及鎧仗、悉送上京。³⁾

とある。まず、遼の官僚、後宮、宦官や職能者が挙げられている。そして書籍や天文曆法を運営するための観測器具、石經（儒教經典）、銅人、漏刻、儀礼の際の樂譜、宮鼎（樂器）、鹵簿（皇帝の行列）の「法物」（礼器）などであろうか。本稿の論点から注目すべきは、おおよそ郊祀に関連するものが無いことである。

これらは上京臨瀆府に送られたとされている。上

京臨瀆府は、太祖耶律阿保機の時代に造営された都城である。遼寧省昭烏達盟巴林左翼旗林東鎮に遺跡があり、現在盛んに発掘調査が行われている⁴⁾。この契丹最初の都城は、南郊儀礼に対応した都城プランを持っていない。(図1)によって分かるように、この都城は、南北連郭式の都城である。北側の城郭は皇城と称せられているように、宮城を含んだ支配民族（契丹族）の空間である。南側の城郭は漢城と称せられるように、被支配民族の空間である。宮城や皇城の正門は東門である。これは遊牧民族のゲルが東向きに作られること⁵⁾と符合する。王者は東面していたのである。つまり上京臨瀆府は、南郊儀礼に向かう皇帝鹵簿が通過する南北方向の中軸線

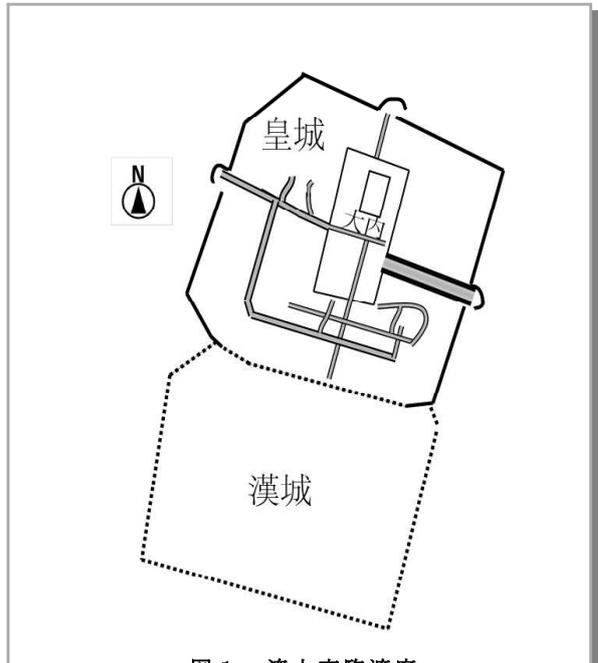


図1 遼上京臨瀆府



図2 遼中京大定府略図

街路を持っていない都城であった。このときの契丹王朝が南郊儀礼によって、王権を正当化するという儒教の王権論をとり入れることをしなかったのである。したがって、遼が五代後晋の東都開封から持ち去ったものに、郊祀に関わるものが存在していないのではない。

もう一つの理由として考えられるのが、後晋の開封には郊祀施設がなかったという事実である。したがって、契丹軍が郊祀儀礼の法物を持ち帰ろうとしても、それは当時の開封にはなかったのである。教科書では、五代の都城は長安・洛陽から開封に遷ったとされているが、これは正確ではない。後梁時代より郊壇・太廟など郊祀を中心とする礼制上の首都機能は洛陽にあった。後晋の郊壇や太廟などは洛陽(洛京)に置かれていた⁶⁾。

後晋の高祖は実施はできなかったものの、南郊親祭によって天を祀ることを契丹に申請し許可を得ている⁷⁾。つまり、契丹王朝が郊祀について知らなかったわけではなさそうだ。したがって、上京臨瀆府で儒教国家の郊祀をおこなうつもりはなかったという説明の方がより説得力をもつ。上京の城郭プランが南北連郭制で東門を正門としているおり、南郊壇は設けられていなかった。遼が儒教の王権論を用いなかったことから、現在発掘調査で明らかにされつつある上京臨瀆府の平面プランを説明する論点が必要なのではないだろうか。

b 中京大定府建設への北宋開封の影響と郊祀の不在

さて 1004 年、契丹軍は再び華北に侵入し黄河まで攻め込んだ。そこで北宋との間に澶淵の盟がむすばれる。この 4 年後に遼は中京大定府を建設している⁸⁾。この都城は計画都市として新築され、南北中軸線をもつ開封とよく似た平面プランを持っている(図2)。

50 年前(946)に契丹が後晋の開封を占領したとき、北宋の開封は大きく様変わりしていた(図3)。後周時代に外城が建設され、三重の城郭をもつ都城となっていた。また宮城南正門から南に延びる中軸線街路(御街)は拡幅され、その両側に御廊という列柱廊が建設され、庶民のための公共空間として賑わうようになった⁹⁾。あるいは政府による「与衆共楽」¹⁰⁾の演出がおこなわれた。澶淵の盟の締結後、年に二回、遼の使節は開封を訪問し皇帝に面会するようになった。遼使は都亭駅から北上するとき御街の中央を通過することを特別に許されたという¹¹⁾。これは、北宋が遼使に、開封の御街の偉容と御廊の繁華を見せつけるための措置だったと想像される。

中京大定府は、三重城壁で御廊に類する廊舎を持った都城であり、開封の都城プランを模倣したものである。中軸線街路は、70 メートルの幅員をもつもので、やはり宋使はここを通過して、遼の皇帝・太后に対面している¹²⁾。その類似性から、開封を 30

年ぶりに訪問した遼使の報告に基づいて建設されたと考えられるのである。ただし、開封の御街・御廊には南郊の時に重要な役割があった。広さ 200 メートルに及ぶ御街は数万人に及んだ皇帝の鹵簿が南郊壇に向かって南下する空間であった。御廊には皇帝の鹵簿行列を庶民が見物する臨時の棧敷が設けられるのである¹³⁾。要するに、御街・御廊は皇帝と都人の間のコミュニケーションの空間であった。一方、遼では郊祀は行われなかった。また皇帝と都人は交流がなく宋の開封における都城社会とは異質であった。中京の都城構造は、君主南面という儒教国家の平面プランに準じた都城ではあったが、儒教の王権論に裏付けられた儀礼空間ではなかったのである。

そもそも、契丹皇帝は都城に常駐しているわけではなく、遊牧民の伝統に従って、移動していた。これを捺鉢という。京師がどこかという問題についても定説がない。あるいはこの問題に意味が無いともいえる。郊祀などの王権儀礼を中国式の都城空間を舞台として行うことはなかったからである。むしろ草原で天地の祭りを王権儀礼として行っていた¹⁴⁾。

なお谷井俊仁氏は、遼前半においては中原に対する大規模軍事行動(親征)によって国権の確立が図られていたが、「澶淵の盟」の締結によってそれができなくなると、(興宗朝以降)仏教による権威確立を図るようになったと述べている¹⁵⁾。これを受けて、藤原崇人氏は、澶淵の盟以降、皇帝権力が仏法と融合し、皇帝が菩薩性をもつ帝王であることを主張するようになったという¹⁶⁾。それは、中京大定府に建設された大仏塔の壁面を飾る彫刻のモチーフなどによっても裏付けられるという¹⁷⁾。

遼の王権のあり方は、独自の王権論(神聖王権)を持ちつつ鎮護国家の仏教を取り入れた奈良時代の日本とも似ているようにおもえる。したがって中京大定府の立ち位置は平城京に似ているといえる。平城京は唐の長安城を模して作られた都城である。ただし長安の朱雀大街は南郊に向かう皇帝の行列が通過するという機能をもつ都城施設であり、100 メートルに及ぶ幅はそのためのものであった。一方、南郊がない日本都城の朱雀大路は天皇の行列がそのために通過することはなかったのである。なお、近年『平安京はいらなかった』¹⁸⁾という刺激的な表題の書物が発売された。それによると平安京の朱雀大路は幅が広すぎて(82 メートル)実用性に乏しく、数年に一度新羅使・渤海使などが通過するために用いられるのみであり、これらの国が滅亡し使節が途絶えると、朱雀大路はますます無用の長物になった

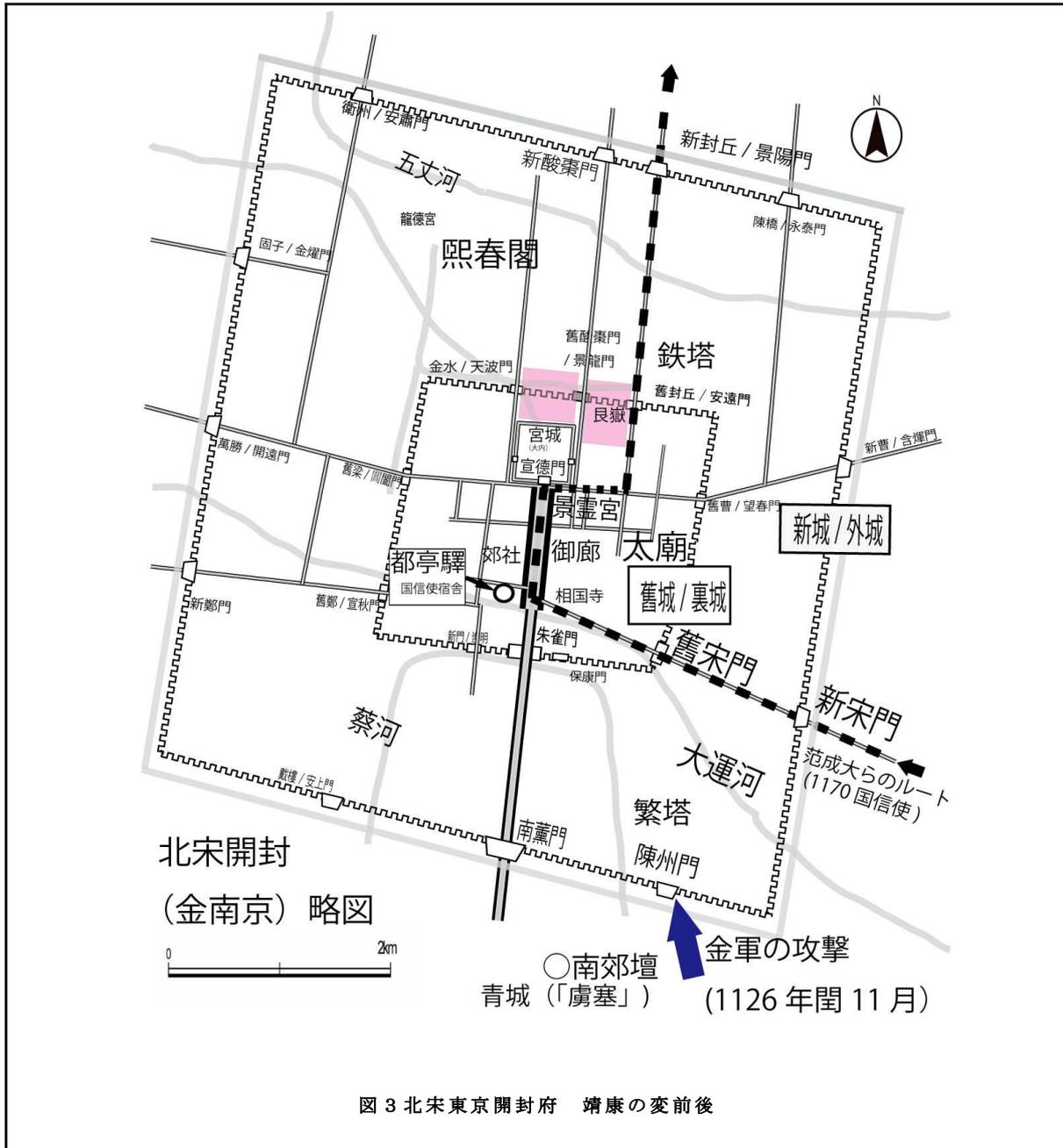


図3 北宋東京開封府 靖康の変前後

という。興味深い指摘である。ただし、桓武と文徳が南郊（交野山）にて昊天祭祀をおこなっていることが知られている。ただし、桓武が南郊にて親祭したのは、長岡京の時期である¹⁹⁾。交野山は長岡京の南郊に当たる地点である。また文徳のそれは大納言藤原良相らによる有司撰事であり、天皇みずから行ったものではなかった²⁰⁾。南郊儀礼に論点を限定すれば、平城京も平安京の朱雀大路も「いらなかった」といえよう。

2 金の都城と郊祀

a 金が開封から持ち去ったもの

金は、1126-7年（靖康の変）に北宋の開封を占領し、張邦昌（楚）を擁立し翌年撤兵する。この時、

徽宗・欽宗から芸能人にいたる多くの人的な資源を、金の当時の首都上京会寧府まで連れ去った。また、多額の金銀とともに、宮廷に所蔵されていた書籍、書画、儀礼に使用する道具（馬車・楽器など）や天文暦法を運用するための観測器具なども持ち去っている²¹⁾。草創期の国家に取って必要とされたのであろう。

・丁巳、金人索郊天儀制、及図籍。

戊午、金索大成樂器、太常礼制器用、以至戲玩図画等物、尽置金宮。凡四日乃止。²²⁾

・虜須南郊法駕、大駕之属、五輅、副輅、鹵簿、儀仗、皇后以下車輅、鹵簿、儀仗、皇太子諸王以下至百官車輅、儀仗、礼器、法物、礼経、礼図、太楽、軒架、楽舞、楽図、舜文

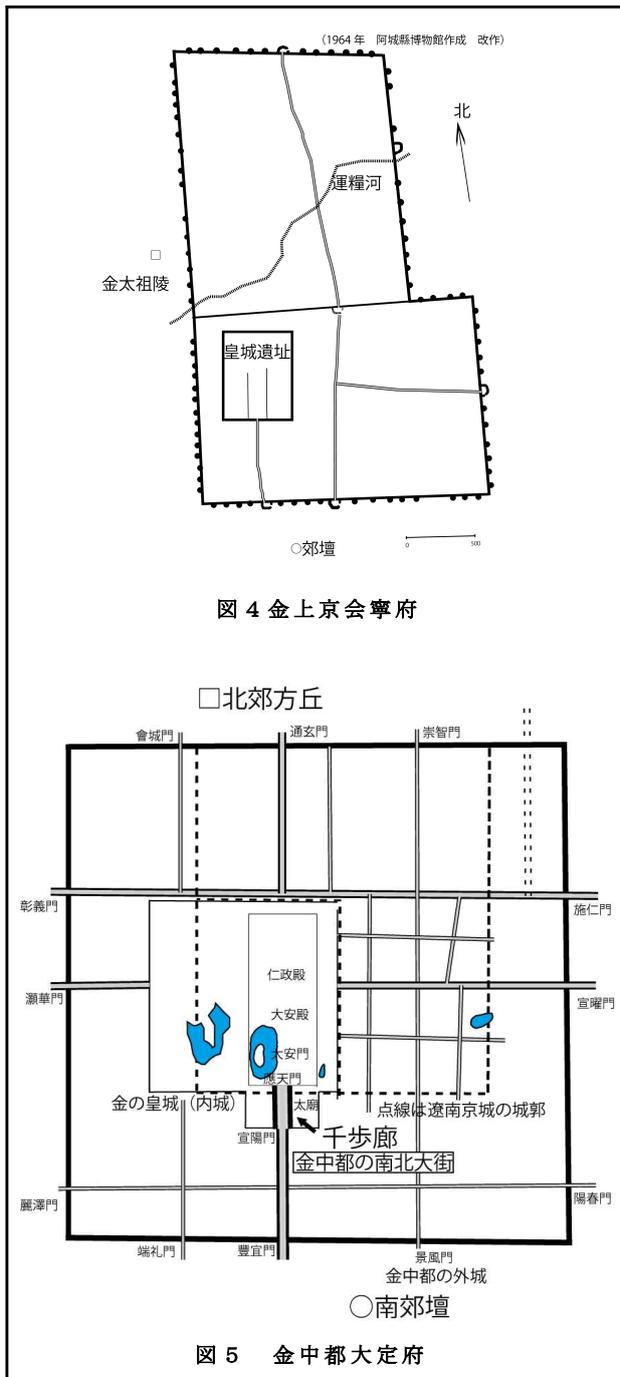


図4 金上京会寧府

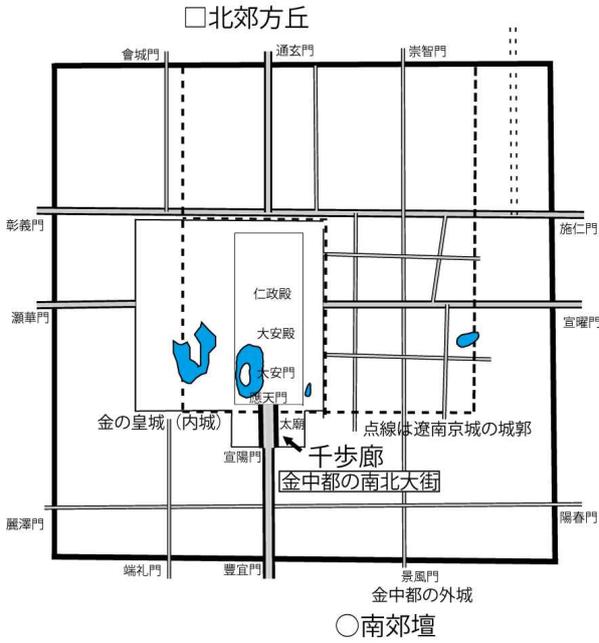


図5 金中都大定府

二琴、教坊樂器、樂書、樂章、祭器、明堂布政、閏月体式、八寶、九鼎、元圭、鎮圭、大器合臺、渾天儀、銅人、刻漏、古器、秘閣三館書籍、監本印板、古聖賢圖像、明堂辟雍圖、皇城宮闕圖、四京圖、大宋百司并天下州府職貢令、応宋人文集、陰陽医卜之書²³⁾。

以上の記事によってわかるように、女真人の金王朝は積極的に南郊儀礼の礼制について北宋の開封から摂取していたことがわかる。前節にて紹介した契丹が947年に後晋の開封から持ち去った記事と比較してみると興味深い。遼の記事では郊祀に必要なものが見当たらない。契丹国家が、郊祀という儒教的王権儀礼に興味を持っていなかったことが改めて確

認される。対照的に金朝は郊祀に対して、並々ならぬ興味を持っていたということである。儒教国家の郊祀儀礼の挙行によって王権の強化をはかる意図を持っていたのである。

1127年(金太宗の天会5年)において、金は上京会寧府をすでに造営していたと考えられている。金上京(図4)は、遼上京臨潢府(図1)にいた旧遼朝の官僚により指導して作られた金の最初の都城であり、南北連郭型の平面プランを持っている。ただし、遼の上京と金の上京との違いは、遼上京が、北城に宮城があったのに対し、金上京は南城に宮城があったことである。金上京の発掘成果によると、南城では南に向かって大街が伸びており、南門を正門とする城郭であったと考えられている。この上京遺跡には、南門外に円丘壇に相当すると思われる丘陵が現在も残っている。これが、上京で南郊儀礼を行った形跡であろう。『金史』の礼志によると、

金之郊祀、本於其俗有拜天之礼。其後、太宗即位、乃告祀天地、蓋設位而祭也。天德以後、始有南北郊之制、大定、明昌其礼寢備。²⁴⁾

とあり、太宗の時に郊祀があったということは示されているが、具体的ではない。天德(1149-53年)とは海陵王の年号である。海陵王時代より本格的に郊祀の制度が定められたという文意であろう。海陵王は、1151年に燕京への遷都を宣言し、2年後に中都大興府と改称され遷都が実施された。遷都した時点で、上京会寧府は廃止され、城内は徹底的に破壊された。

中都(図5)は、遼の南京を改造した都城である²⁵⁾。遼の南京は南北中軸線をもたないプランだったが、金中都は西南方向に拡大され、南北中軸線をもつ、中央官闕型の都城に改造されたのである。先述したように、遼が中京大定府を建設したときもやはり南北中軸線・中央官闕型都城であったが、郊祀施設を持たなかった。金が遼の南京を改造して中都としたのは、郊祀を本格的に行うことができる都城空間構造を形成するためだったと考えられる。

中都は、南郊と北郊の両方をもつ都城である。前掲『金史』礼志には「始有南北郊之制」とあった。『金史』礼志の別の部分には、

南郊壇、在豊宜門外、当闕之巳地。円壇三成、成十二陛、各按辰位。壇牆三匝、四面各三門。齋宮東北、膠庫在南。壇墻皆以赤土圻之。北郊方丘、在通玄門外、当闕之亥地。方壇三成、成為子午卯酉四正陛。方壇三周、四面亦三門。²⁶⁾

とあり、豊宜門という外城正南門の外に南郊壇(円丘)があり、通玄門の外の北郊に方丘があった。

このような制度は、儒教の制度を踏まえたものであり²⁷⁾、宋人官僚の知識が欠かせない。『金史』巻43 輿服志、天子車輅(P.970)には、

大定十一年(1171)、將有事於南郊、命太常寺檢宋南郊禮、鹵簿当用玉輅、金輅、象輅、革輅、木輅、耕根車、明遠車、指南車、記里鼓車、崇徳車、皮軒車、進賢車、黄鉞車、白鷺車、鷺旗車、豹尾車、輅車、羊車各一、革車五、属車十二。除見有車輅外、闕象、木、革輅、耕根、明遠、皮軒、進賢、白鷺、羊車、大輦各一、革車三、属車四。

按五礼新儀、玉輅以青、金輅以緋、象輅以銀褐、革輅以黄、木輅以皂、蓋其物有合随輅之色者、有当用別色者、如玉輅用青糸繡雲竜絡帶、青羅繡宝相花帶、青画輪轅、青鼈牛尾、此随輅之色者也。若象、木、革輅則当用緋、用銀褐、用黄及皂。若至尊乘御歩武所及、非若余物但為美觀、其踏床、倚背、踏道之褥皆用紅錦、座褥、及行馬褥、透壁輦簾三、用銀褐、黄、青羅錦三色。又大輦、宋陶穀創意為之、至祥符中以其太重、減七百余斤、可見當時亦無定制、各以意從長斟酌造之²⁸⁾。

とあり、大定11年(1171)の郊祀の際の史料であるが、宋の南郊の制度に倣い、また『政和五礼新儀』²⁹⁾を用いて、南郊儀礼が準備されたことがわかる。靖康の変において金が持ち去った宋の礼制資料が用いられたのであろう。『政和五礼新儀』とは徽宗の指示の元、新法官僚たちが定めた儀礼書である。これは金の礼制の性質を暗示している。

b 金朝による南北分祭による郊祀

北宋時代後半、南郊で天地を合祭するか、それとも冬至に南郊(円丘)で天を祀り夏至に北郊(方丘)にて地を祀る南北分祭にするかの議論が廟堂で行われた。従来は冬至に南郊で天地を合祭していたが、『周礼』の新しい解釈による分祭が新法派官僚によって主張された。それに対し旧法党からは強硬な反対論が出たが、神宗皇帝の元豊6年(1083)年には分祭で郊祀が行われた。徽宗時代に編纂された『政和五礼新儀』は、南北分祭によって郊祀制度を定めている³⁰⁾。旧法政権下の元祐時代には一時的に合祭となるが、新法政治に戻ると分祭で行われたのである³¹⁾。ただし、徽宗が欽宗に譲位し、徽宗時代の新法政治が否定される。郊祀も南郊で天地合祭することになった。

南宋の臨安では、紹興13年(1143)に南郊で天地を合祭するという形式で、初めて郊祀が行われて

いる。南宋では、靖康の変での敗北は、新法政治の失敗とされていたから、南北分祭は行われなかった。元祐時代に行われた南郊で天地を合祭する制度が復活していた³²⁾。「朕最愛元祐」とは高宗の紹興4年の発言である³³⁾。臨安府では、一貫して南郊壇のみであり、北郊方丘はついに建設されなかったのである。

一方の中都大興府(図5)では、先述したように南郊円丘と北郊方丘がともに築かれ、南北郊にて天地への儀礼が行われていた。『大金集礼』に分祭を前提とした制度が記述されている³⁴⁾。ほぼ同時期(1140年代)に双方でこのような対照的な郊祀制度になった。この対比は非常に興味深い。南宋は旧法の方針を受け継いだといえるが、金はなぜ、北宋で新法派が行った南北分祭を選択したのであろうか。

中都に遷都したのは海陵王である。彼の時代には、華北まで領土が拡大し、女真族・契丹族や漢族などからなる多文化の集団をどのように統治するかが、課題となっていた。かれは先代の熙宗を弑して即位したためその正統性を確立する必要があった。そのような課題に対し、海陵王は即位後宗族の勢力を抑圧し君主独裁制度を確立し、宋学的な「一君万民」思想³⁵⁾によってまとめ上げようとしたのである。そのために宗室の勢力が強かった上京会寧府を破却し中都大興府を建設した。金は北宋滅亡後、宋の官僚や宋の太学で学んだ学生を政府に集めて華北統治を行っている。かれらは新法政治の元で育っているのである。また、金が靖康の変で開封を攻略した際に、持ち去った礼制資料は新法時代のものが多く含まれていた。このようなことから判断するに、金朝の礼制が新法時代のそれを受け継いでいた可能性は高いといえよう。前項の最後に触れたように『政和五礼新儀』が用いられていることがそれを示しているのである。

海陵王が南征に失敗し暗殺され世宗が即位する。その際女真主義が復活し、上京会寧府が再建されるのである。現在の遺跡に残る南北の郊壇も再建されたと推測される。世宗時代における海陵王の行き過ぎた中華帝国化の是正によっても、郊祀に関しては変更なかった模様である。

開封で郊祀(親祭)が五代王朝において初めて行われたのは後周太祖の事である。郊祀を南北に分祭するためには、中央宮闕型の開封が理想的なものとなる。開封は地方都市を拡大したりして改造の末に郊祀を挙げるに理想的な平面プランを獲得する。北闕型の長安は南郊中心の都城プランとおもわ

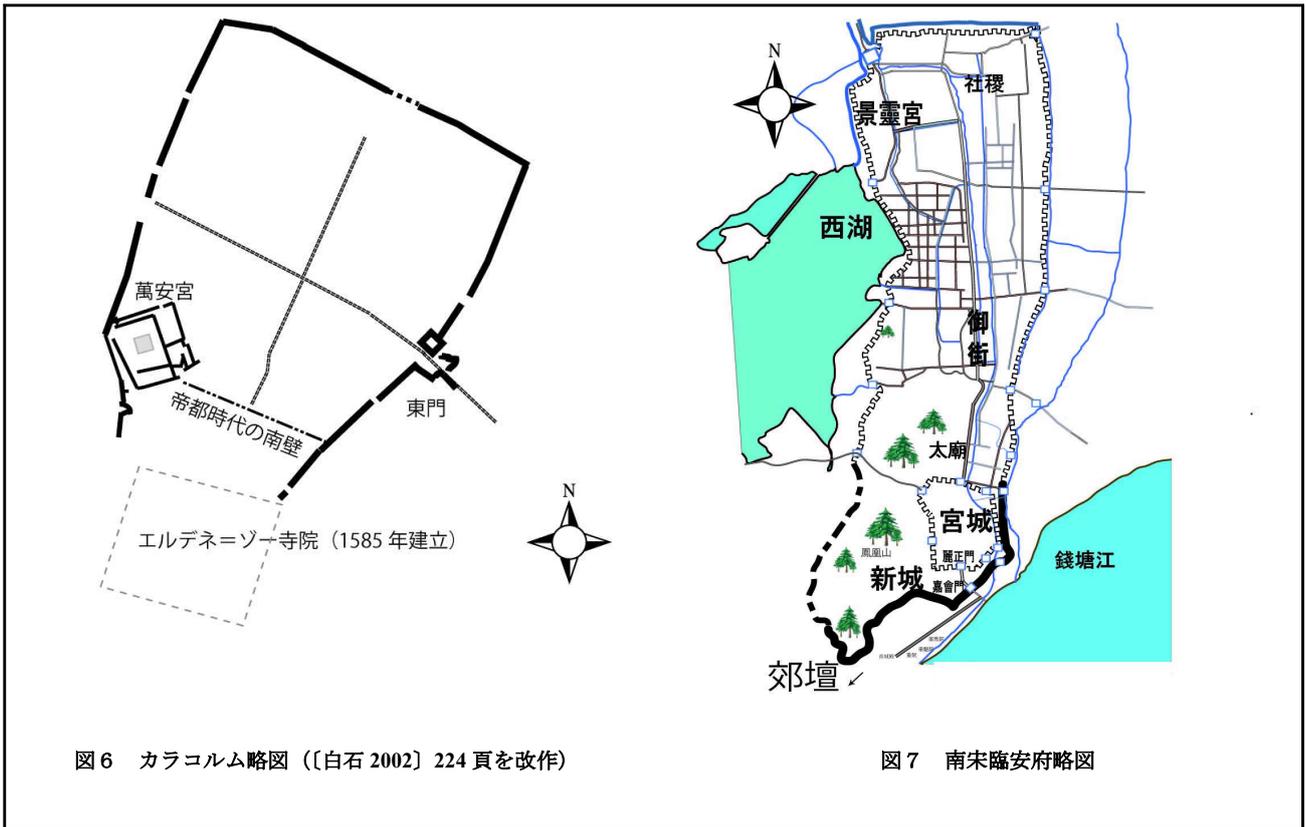


図6 カラコルム略図（〔白石 2002〕 224 頁を改作）

図7 南宋臨安府略図

れる。北壁からはみ出した形の大明宮が政治の中心となった則天武后以降は南郊にて天地合祭で行われたようだ³⁶⁾。金の中都は、長安の北闕型プランをとらず、開封の中央宮闕型をモデルとした。海陵王が中都を建設するとき南北分祭が都城プランに組み込まれていたと考えられよう。

3 元朝の都城と王権儀礼

a モンゴルによる金の開封占領と元朝による南宋臨安の郊壇の破壊

1234年の元が金を滅ぼしたときに、金から郊祀を取り入れる可能性はあった。オゴタイの時代にカラコルムが造営されたのは1235年であり³⁷⁾、金が滅亡した直後に建設されている。しかしながら、その平面プランには金朝の都城（中都や開封）の影響はあまり感じられない。平面プランの特徴を述べると、カラコルムは南側に万安宮という宮殿を配しているため南北復郭制の範疇になろうか（図6）。東門がカラコルムに至る幹線道路の到着点であり³⁸⁾、城の内外をつなぐもっとも大きな道路が通っており、カラコルムの主要な玄関口だったと考えられている³⁹⁾。そこには、北門や西門などにはない大きな甕城も見受けられる。一方、宮殿は南端に偏して設けられており、南郊儀礼を行うための南北中軸線街路や、南郊壇などは見いだされていない。宮殿が南

端にあるという都城構造は、「当時から奇異の目でみられていたようだ」⁴⁰⁾が、同時に存在していた南宋の行在臨安も同様に宮殿は南端にあり市街地は北側に広がる構造であった（図7）。

オゴタイ＝ハーンとその政権は、あまり中国式の郊祀には関心を持たなかったようだ。金を滅ぼした際に開封（金の南京）より、やはり人的資源や書籍が持ち出されてるが、残念ながらあまりまとまって記録されていない。断片的にはあるが、『元史』の以下の記事を見いだすことができた。

- ・その臣崔立汴京を以て降るのとき、（張）柔、金帛においては一も取るころなし。独り史館に入り、金実録並びに秘府の図書を取り、耆徳及び燕趙の故族十余家を訪ね求め、衛送し北に帰る⁴¹⁾。

- ・楚材も又た人をつかわして入城し、孔子の後を求むるを請う。五十一代の孫元措を得る。奏して衍聖公に襲封し、付するに林廟地を以てす。命じて太常礼楽生を収め、及び名儒、梁陟、王万慶、趙著等を召し、九経を直釈し、東宮に進講せしむ。又大臣の子孫を率いて、経を執り義を解し、聖人の道を知らしむ。編修所を燕京に、経籍所を平陽に置く、これより文治興る。⁴²⁾

前者は、金の実録や図書などを北方へ送った記事である。後者は耶律楚材の伝記であるが、「太常礼

樂生」と「名儒」を求めていることが注目される⁴³⁾。ただし、金の資料のように、明確に郊祀儀礼についての資料を収集している様子はいかがわれない。

さて、この 42 年後、南宋政権が臨安で降伏する（至元 13 年 1276 年）。元は、遼金と同様に北方に恭帝を連れ去っている。物資について『元史』には、



図8 郊臺（『咸淳臨安志』京城図）

（至元 13 年）三月丁卯、…伯顔臨安に入る、郎中孟祺を遣し、宋太廟四祖殿、景靈宮礼楽器・冊宝、および郊天の儀仗、及び秘書省、国子監、国史院、学士院、太常寺図書・祭器・楽器等物を籍さしむ⁴⁴⁾。

とあり、バヤンの命により、太廟や景靈宮の礼楽器、そして南郊の儀仗、また南宋時代に集められた図書が接収されている。そのなかで、太常寺の図書は礼制関係のものであろう。宋代の郊祀は宮殿を出た皇帝は太廟や景靈宮にて祭祀をおこない祖先に対して祭天の儀礼を行うことを報告してから、南郊壇に向かうものだった。このように郊祀資料を集めた大元ウルスではあるが、郊祀をクビライ自ら行うことはなかったらしい⁴⁵⁾。

さて、南宋の臨安では、郊壇（図8）と隣接して官窯があり、宮廷向けの高級磁器を製作していた。いわゆる南宋「郊壇下官窯」である。戦前日本の杭州領事をしていた米内山庸夫氏は、遺物の採集・発掘を行い学術的な分類を試みている。郊壇下官窯は大谷光瑞氏の発見にかかることとされているが、米内山は官窯の存在とその価値を確認した先駆者として知られている⁴⁶⁾。現在は官窯跡は整備復元され、「南宋官窯博物館」が建設されている。ところで、「郊壇下」と称せられているが、我々は官窯博物館を訪問した際に郊壇の姿を見ることはできない。なぜならば元朝は南宋を降服させたのちの至元 22 年（1285）、南郊壇（郊天台）を破壊しているののであ

る）。

『元史』本紀には、

至元二十二年（1285）春正月庚辰…宋の郊天台を毀つ。桑哥言く：「楊輦真加云く、会稽に泰寧寺あり、宋これを毀ちて以って寧宗等の攢宮を建てる。銭唐に竜華寺あり、宋これを毀ちて以って南郊をつくる⁴⁷⁾」と。

とある。この提案をおこなった楊璉真加は、クビライに重用され仏教興隆に活躍したチベット仏教の僧侶である。彼は、南宋政権が仏寺を破壊して南郊を作ったと主張する。こうして臨安の南郊壇は仏教界からの意見から破壊された。なお楊璉真加とそのボス桑哥は、南宋の財物を略奪して私財を蓄えたことで史上悪名を残している。この郊壇破壊も、財物強奪の一環として『元史』には位置づけられている。元朝の当局者が郊壇を破壊することで、南宋王権の正統性を主張する儀礼上の機能を喪失させたという方向性は史料的には確認できない。ただしクビライ朝時代には儒者と非儒者が対抗的な関係にあったという指摘もみられる⁴⁸⁾。チベット仏教関係者による儒教儀礼施設の破壊という問題とも捉えられないだろうか。

b 大都建設⁴⁹⁾と中国都城史の潮流

金の中都大興府はモンゴル帝国による接收後、燕京と改称され華北支配の拠点（燕京等処行尚書省）となっていたが、その北東に大都大興府の造営が開始されたのは、1260 年のクビライ即位後の至元 3 年（1266）のことであった⁵⁰⁾。

王朝交代に際し、前代の王朝の都城を拡大した都城作りが行われることは中国の歴史には散見される。たとえば、隋は南朝建康や北周長安よりも大きな大興城を建設し、統一後は建康を破壊し、北周長安を後苑に組み入れている。唐長安城は朱全忠によって破壊され、都民は強制的に洛陽に移住させられ、宮殿の材木は洛陽の宮殿建設に用いられている。後周は統一王朝の都城にふさわしい広大な外城を唐代の宣武軍の城壁の廻りに建設している。また、金は征服した遼の南京城を包み込むようにして、中都大興府を建設している。

したがって大都（図9）を建設するに際し、征服後 30 年という長期にわたり支配下に置き、行政・軍事の拠点としていた旧金中都を意識して都城建設を行ったことは想像に難くない。大都の平面プランは、余り指摘されていないようだが⁵¹⁾、金の中都のプランに酷似している。拡大したものであるといえるであろう。まず外城は、ほぼ正方形を呈している。

特に、金の中都の皇城と元の大都の皇城の城壁の形状は、実によく似ている。皇城の西側に園林（太液池）が設けられており、その太液池の島の名称である瓊華島は同一である。元の西苑は金の離宮を利用したものである。大都皇城が都城の中心から南にずれていることが問題となっているが⁵²⁾、これは金の離宮の池塘を金の皇城のプランに従って大都の西苑としたためではないだろうか⁵³⁾。

宮城の正南門（端門）について比較してみよう。南宋の臨安端門（麗正門）が一門三道なのに対し、金の中都は一門五道の大門（応天門）を配している。元の大都の端門崇天門は、金の中都になら一門五道に設えられている。北宋では徽宗朝までは宮城の

正南門（端門）である宣徳門は一門三道であった。それが、蔡京の提案により一門五道の大門に作りかえられている。南宋では蔡京政治への否定の意味もあってか一門三道の門だった。一方、当時存在していた開封のプランをモデルとした金中都では一門五道が用いられている。金が新法的な政治文化を継承した一つの例ともなるだろう。この端門の構造は、元の大都でも踏襲されたのである。元大都の端門（崇天門）の姿は絵画に残されている。現在、アメリカ（カンサスシティ）のネルソンアトキンス美術館に所蔵されている「宦迹図」（**図10**）である⁵⁴⁾。この図巻に見える崇天門と、遼寧省博物館蔵の「鹵簿鐘」（**図11**）に刻まれていた徽宗後半の一門五道の宣徳

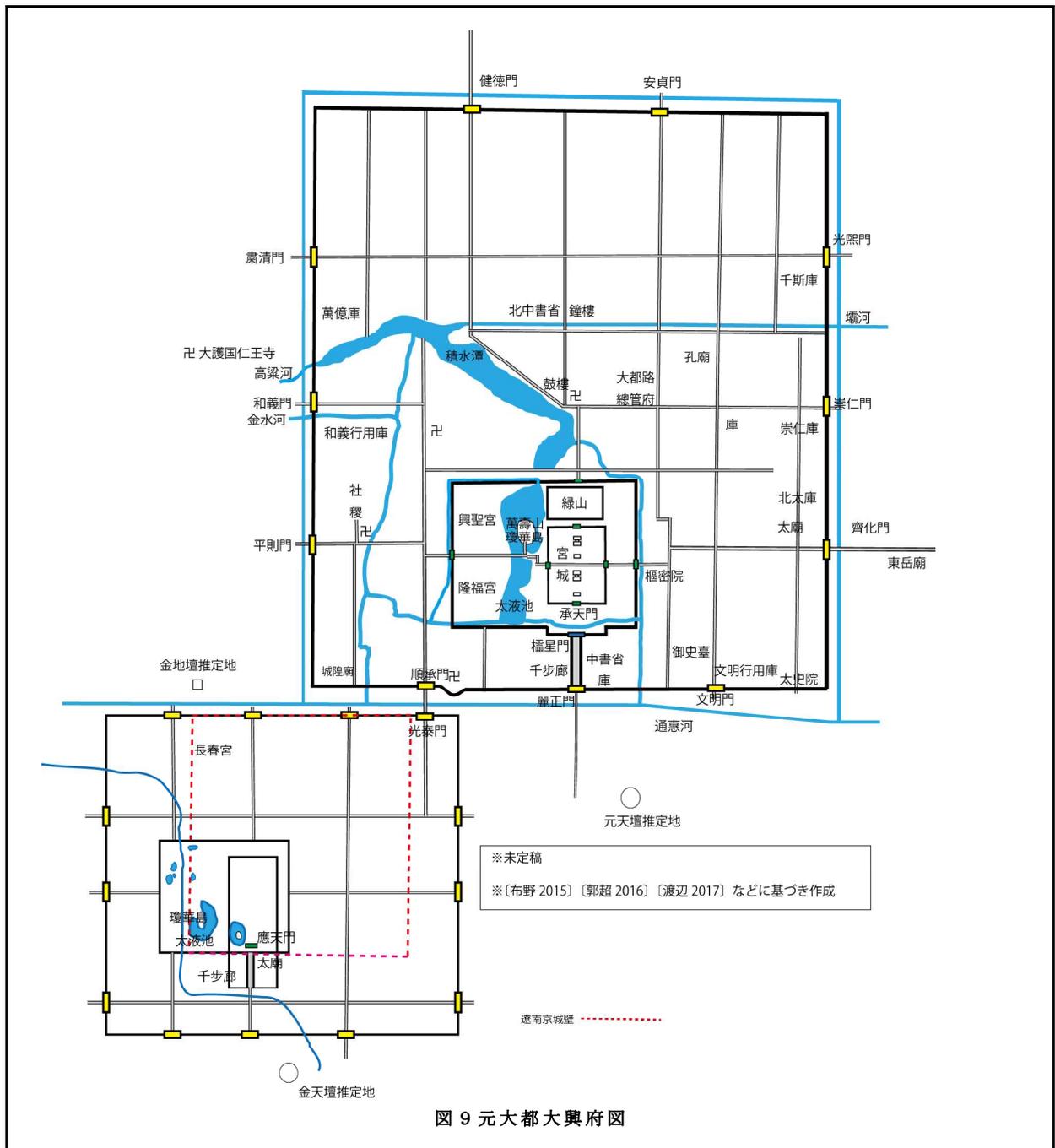


図9 元大都大興府図



図10『官迹図』ネルソン=アトキンス博物館蔵（元大都の端門「崇天門」）



図11『鹵簿鐘』遼寧省博物館蔵（北宋開封の端門「宣德門」、徽宗時代に改造）

門の姿とはほとんどかわらない。

皇城の中軸線街路に千歩廊が設けられている点も共通する。これは北宋開封の御街・御廊の模倣といえる。大都では皇城から千歩廊が飛び出して、外城の南門まで続いているが、この形態は金中都において出現した皇城の形態を祖型としている。太液池の園林は万歳山と称せられているが⁵⁵⁾、これは、北宋末期に開封宮城の東側に設置された良岳の別称であり、中都・大都が開封の強い影響を受けていたことが判明する。現在ものこる人工の山を形作っている奇岩は、北宋開封の良岳において用いられていた太湖石であり金の離宮建設の時に開封から運ばれてきたものだという⁵⁶⁾。

大都の都城構造は、『周礼』考工記に見える「左祖右社、前朝后市」という都城空間の理想型が用いられて造営された都城であるという⁵⁷⁾。中国都城の要素は実はそれだけではない。『周礼』考工記にはない南北中軸線街路や千歩廊などが設けられている

⁵⁸⁾。佐川英治氏が詳論しているように、儒教国家では南北郊祀を行う王都の役割が重要であり、後漢・魏晋南北朝の洛陽・建康・鄴都において中軸線街路を特徴とする都城プランが発展し唐の長安へ至るといふ都城史の潮流がみられる⁵⁹⁾。唐後半期の長安から皇帝・官僚だけではなく都城住民を巻き込んだ祝祭へ変化していった⁶⁰⁾。北宋開封ではその潮流を受け継ぎ都城空間の特徴となっていくのである。「与民同楽」の公共空間として中軸線街路（御街）の両側に設置されたのが列柱楼「御廊（廊千歩）」である。これは北宋の開封で生まれた新しい都城空間の要素である。

中軸線街路や千歩廊そして『周礼』考工記のプランを大都是備えていた。少なくとも大都是、南方からアクセスした場合は、中原都城の景観を呈していたのである。それは、金中都を介して受け継がれたものと考えられる⁶¹⁾。

ただし、金中都と元大都の相違点にも我々は注目

しなければならない。中都では皇城内に太廟・社稷が置かれているが、大都では皇城外、外城の至近に太廟や社稷が存在するのである。福田美穂氏は皇城内においてモンゴルの要素が多くテントを皇城内で張られていたことを強調している⁶²⁾。また、杉山氏は、大都皇城も大内と太子府以外は概ね空地だったと推測する⁶³⁾。大都の皇城は両氏の見解からすると遊牧民の伝統に基づく複数の「オールド」（皇帝・太子・皇后など）で構成される緑地の空間であったと考えられる⁶⁴⁾。『東方見聞録』あるいは『世界の記』によると、皇城と宮城の間の空間には舗装された道路の両脇に見事な草場が広がっていたという⁶⁵⁾。その空間に連続する皇城北部には人工の山（緑山）があり、そこは「綺麗な木がいっぱい植わっており、いかなる時節でも葉を落とさず、いつも緑色」だった⁶⁶⁾。漢文資料にも、草原から始まった創業の刻苦を忘れないようにと、クビライは宮殿前に砂漠に自生する「莎草（カヤツリグサ）」を植えさせたという記録がある⁶⁷⁾。皇城内についてモンゴルたちの「聖なる空間」という表現を用いる論者もいる⁶⁸⁾。

したがって皇城内には太廟や社稷という儒教国家の礼制施設は入り込めなかったのであろう。さらに中書省や枢密院、御史台などの中国起源の官庁がやはり皇城外に置かれた事⁶⁹⁾にも関わる問題であろう。これは大都だけの特色ではない。遊牧帝国契丹（遼）の中京はこのような空間構造をもつ都城だった。二重目の城壁（皇城にあたる）と宮城との間は何もない場所だったという⁷⁰⁾。また中京では、開封にならって中軸線街路の両側に御廊が設置されていたが、二重目の城壁の部分には設置されなかった（**図2**）。同様に元の大都でも、中軸線街路の千歩廊は、皇城の入り口の櫺星門までであった。金中都与北宋開封が端門と朱雀門の間に千歩廊があったことと比較すると、遼中京と大都の空間構造が遊牧国家が建設した都城構造として注目される。

大都は、開封や中都で育まれた『周礼』考工記・南北中軸線・千歩廊」を空間構造に確かに取り入れている。しかし、その空間構造をもちいて宋金のように儒教的王権儀礼（郊祀）をクビライは実施しようとはしなかった。クビライはこの南郊儀礼のために中軸線街路に駕をすすめ南郊壇で天を祀ることをは遂になかった。

南郊壇の建設についてはやや錯綜している。『元史』祭祀志によると、1294年（至元31）、クビライの死去の直後に「始めて」都城の南7里において建設されたとする⁷¹⁾。死去したクビライに対する諡を南郊にて天に報告するためであり、有司撰事で行わ

れている。大徳6年（1302）からは、有司撰事で天地を祀ることになった⁷²⁾。一方、『元史』成宗本紀では、大徳9年（1305）に郊壇が築かれている⁷³⁾。祭祀志には、クビライ時代の1275年に建設されたという記事もある⁷⁴⁾。興廃を繰り返したとも考えられる。

基本的には中都から受け継いだ大都の都城プランではあるが、クビライ時代には、南郊儀礼の舞台としては有効的に用いられなかったのである。南郊親祭が大ハーンによって行われたのは、元では文宗トク・テムル⁷⁵⁾と順帝トゴン・テムルの二度にとどまる⁷⁶⁾。すなわち、この意味で、杉山氏の述べるようにこの平面プランは「見せかけ」⁷⁷⁾なのである。とすると、つぎに問題となるのは、クビライの大都では儒教儀礼に代わる王権儀礼として「なにが」「どこで」行われていたのかという問題である。伝統的な中国都城とは異なる都城構造がこの検討によって見いだされると考えられる。

c 大都とチベット仏教

大都の太廟は至元3年（1266年⁷⁸⁾）に「成」ったというが、純粋な儒教的な祖先祭祀施設であったとはいえないようだ。クビライ自身も中国式の儀礼には無頓着だったようである⁷⁹⁾。太廟ではシャーマンによる祭祀が行われ、クビライが自ら祖先を祀ることもなかった⁸⁰⁾。（シャーマニズムによるモンゴル式の祖先崇拜は皇城内でも行われていた⁸¹⁾。）1269年、クビライの名により、太廟では一週間にわたって昼夜分かたず帝師パクパによって仏事が行われており、翌年にはパクパ文字で宗廟での祝文が書かれたという⁸²⁾。クビライが重視した儀礼は、儒教のそれではなく、帝師パクパを媒介として取り入れたチベット仏教のそれだったのである。

石濱裕美子氏は、大都の太廟完成年とパクパの建立したチベット式仏塔の完成年は1年しか変わらないことに注目する。太廟と仏塔は共に祖先祭祀の施設であることから、中国都城文化だけによって大都の建設が行われていないことを指摘する⁸³⁾。むしろ、石濱氏は、帝師パクパの誕生と大都の完成は連動しているとのべており、大都の造営とクビライの王権をチベット仏教思想の基に演出する作業が同じ年（1267年・至元4年）に始まっている事を強調する。パクパの要請により、大都の宮殿等の空間でクビライを転輪聖王として王権を強化する仏教儀礼が行われ、王権を象徴となる仏教的シンボルが設置されるようになったという⁸⁴⁾。

①大都宮城正門の崇天門の「右鉄柱高数丈」に4本

の鉄の縄で金輪が固定された。これにより、クビライが全世界を構成する四つの大陸すべてを支配する王、金転輪聖王（転輪聖王の最高格）であることを示すことになる。それを崇天門を通過する百官や諸国の使節に知らしめる意図があったという⁸⁵⁾。

②大都の中心的宮殿である大明殿の御座のうえに「白傘蓋」を置いた。

③クビライを金輪聖王として表現する白傘蓋仏事が行われた（1270 年より）。御座にあった「白傘蓋」を奉じた行列が帝師を先頭に皇城の四圍をめぐる御座にもどる次第で盛大に行われるようになった。その行列を皇帝と皇后が宮殿から参観し、行列に参加した人々と視線を交えた（游皇城⁸⁶⁾）。游皇城のルートは崇天門前を通過するので、先述の金輪を参拝することになる⁸⁷⁾。

④白傘蓋仏事（游皇城）の拠点であり歴代帝師の居所となる大護国仁王寺が造営される（1270）。そのほかチベット仏教の大寺院が次々とネパール人技師の指導により建設され、大都を「チベット仏教色

に染め上げた。⁸⁸⁾」

石濱氏の紹介にかかるパクパが仏塔建設において記した文章には、パクパにとっての大都の姿が描かれている。それによると大都は帝釈天の都「善見城」であり、クビライは神々の王、帝釈天にたとえられている。大都の西側には仏塔が林立していた。これは「善見城」の郊外の「相雑苑」という天人の集う園の空間になぞらえられている⁸⁹⁾。

クビライ時代に造営された大都の新城（北城）は金の中都や南宋の臨安をしのぐ規模をもった。これによって征服者の力の可視化が実現する。また大都は『周礼』考工記や南北中軸線街路など儒教国家の都城構造の基本形を用いた。ただし、クビライ政権は大都（新城・北城）で儒教国家の王権儀礼を行うことには積極的ではなかった。王権儀礼の面から見ると大都は石濱氏が指摘するようにチベット仏教の色彩が強かったといえる。このような平面プランを「見せかけ」だけ流用した都城作りは、遼の中京や日本の都城と共通するといえよう。

ただし、「游皇城」は皇帝と都人とのコミュニケーションをふくむ行事であり、宗教的な背景は別として、「与民同楽」によって王権強化を実現するためのプログラムであったという⁹⁰⁾。帝師が先導する行列に参加する人々と皇帝（ハーン）が視線を交差し合っていた。開封では、上元観灯や郊祀などのとき、皇帝と都人が空間共有（「与民同楽」）する公共空間として、中軸線街路に「廊千歩」が新設された。『東京夢華録』の記述にあるように、開封の宣徳門前の広場には上元観灯の時に「与民同楽」の大牌が掲げられ、徽宗皇帝と都人がともに祝祭を楽しんだ⁹¹⁾。大都での「游皇城」の通路をたどると「千歩廊」が置かれた街路が用いられている。宋元都城の「千歩廊」には都城の構造物として



図12a 『官述図』にみえる 檣星門の頂部



図12b



図13 徐揚『京師生春詩意図』（北京故宫蔵）明清北京の牌楼

共通の有用性があったといえよう。

先ほど紹介したように元画「宦迹図」には、大都の端門、崇天門が描かれている。北宋開封の宣徳門に似た、闕をもった伝統的な宮城の正門（端門）である。一方「宦迹図」の崇天門の前方には一座の牌楼（櫺星門⁹²⁾が描かれている（図12a）。上部だけがトリミングされているが、三つの部分に分かれている構造は標準的な牌楼に見える。ただしそれぞれの頂上部には蓮花をあしらった台座の上に立つ「輪」に仏像の光背のような形状のものが設置されている。（図12b）は現代のチベット仏教仏具の「金輪宝」である。「宦迹図」のものによく似ている。櫺星門上に据えられたものも「金輪」なのではないかと思われる。至元7年（1270）、バクバの提案によって金輪聖王の象徴である「金輪」が崇天門そばの鉄棒に4本の綱で固定されたという。これは、「宦迹図」のものには該当しないようだ。ただし、崇天門の前に金輪が置かれたことは事実であったわけである。

そもそも、大内の正門（端門）は『周礼』天官では「象魏」⁹³⁾ともいわれるように儒教国家における国家権力の象徴である。端門前の広場では様々な国家儀礼がおこなわれ人々が行き交う⁹⁴⁾。そこに仏教王権のシンボルである「金輪」が配されていたわけで、多くの人々に仏教世界の王者（金輪聖王）としてのクビライの権威を示していたのである。儒教的な都城の枠組みあるいは外見を持ちながらも、実際の王権理論としては儒教を中心とはしていなかった大都の特徴がこの問題を通じても了解される。

大都端門前を荘厳するこの「金輪」を備えた牌楼は、長安・開封など儒教的都城の端門前には見られない。例えば開封の宣徳門とその門前を描いた「鹵簿鐘」にはこのような建造物やシンボルは確認でき

ない。

明清の北京前門前には巨大な牌楼が設置されていた（五牌楼、正式名称「正陽橋牌楼」。現在復元されている）。（図13）は、乾隆年間の徐揚『京師生春詩意図』（北京故宫蔵）⁹⁵⁾の部分である。おそらくは元の大都の櫺星門の流れを受けた施設であろう。しかしながら「金輪」に類する荘嚴は行われていない。

つまり、この元画「宦迹図」の櫺星門はチベット仏教の色彩を強く持った大都の性格を代表しているものと考えられよう。

d 上都における毎年の王権儀礼

元の都城制度は遊牧民の生活習慣と密接な関連性をもった複都制である。宋朝のように陪都への皇帝行幸がほとんど無いような複都制⁹⁶⁾とは違い毎年上都と大都の間を往復していた。冬の間は、南の大都に皇帝は住み、夏になると内モンゴルの上都に移動していた。冬至に皇帝（大ハーン）が滞在しているのは大都である。皇帝とその一族は都城にあるときもゲルで暮らしていたようであり、遊牧民としての生活文化を廃さなかったという⁹⁷⁾。

儒教国家では、京師（都城）には郊祀を行う施設が揃っており、そこを動くことは基本的にはない。大元ウルスの場合は皇帝は毎年上都と大都の間を移動していた。『元史』は中国正史の伝統的な記述法で書かれているので皇帝が「大都」に戻るときは、「上都より至る。」と書かれている。一方大都から上都へ向かうときは「車駕幸上都」と記録されており、まるで大都が京師で上都は陪都であるかのようなのである。しかし実際には大都と上都は礼制上はその地位は差はなかったといえよう。なぜならば双方でそれぞれ毎年重要な王権儀礼が皇帝（大ハーン）親

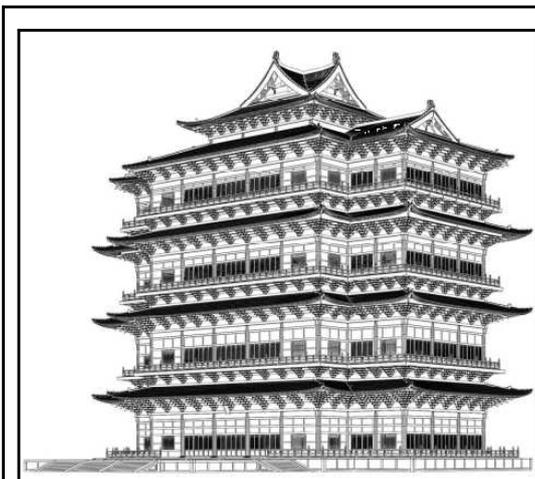


図14 大安閣図 [王貴祥2017] より

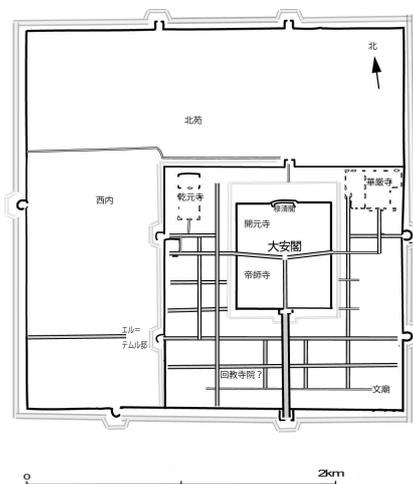


図15 上都開平府図

臨の元で挙行されているからである。たとえば、上都においてもチベット仏教の仏寺が作られ、僧侶たちは元朝皇帝の王権を荘厳することに深く関わった。帝師がハーンの移動とともに上都と大都を往復していることも中村氏の研究に依って明らかにされている⁹⁸⁾。前項で触れたようにパクパの提案により始まった「遊皇城」という仏教に基づく王権儀礼は大都で2月15日に行われたが、上都でも6月15日に皇帝臨席の下で行われていた⁹⁹⁾。すると、上都では遊皇城の直後の6月24日に、モンゴルの最高の宗教祭である「洒馬妳子」が行われたわけである。この時期の上都で国家的な祝祭が連続していることは注目される。これは馬乳を注いで天を祀り、チンギス=ハーンを配享するものであった¹⁰⁰⁾。チベット仏教は漢地と草原を超越した存在であるが、後者は草原に立地する上都の特性を代表する儀礼である。

1260年、クビライが当時まだ開平府とっていた上都でクリルタイを開催しハーン位についている¹⁰¹⁾。この時は、アリクブケと雌雄を決する戦いのさなかでの自派のみのクリルタイ開催である。いわば上都はクビライ家にとってみると興王の地なのである。1294年1月クビライが大都で死去すると、柩前即位は行われず、4月に上都でクリルタイが開かれそこで継承を認められた孫のテムルが即位している¹⁰²⁾。1307年6月、内乱を平定したカイシャンは曾祖父クビライにならって上都にてクリルタイを行い即位している¹⁰³⁾。このようにクビライが上都で即位したことは、その後の歴史のなかで重い意味を持った¹⁰⁴⁾。

そもそも、クリルタイは夏営地で開かれるものだった。クリルタイが開かれない平年においても、上都には夏季に皇族や貴族が集まり、「朝現」が行われ、「軍国大事」が討論されたという¹⁰⁵⁾。そのために宮城・皇城の北側に広い外城の空間が用意されていたのであろう。広大な領土に分散しているモンゴルを集めて行われ、その結束を確認する「朝現」は大ハーンの正統性を象徴する王権儀礼であったとも考えられる。

大ハーンの即位式の空間として用いられたのが、上都の正殿である大安閣(図14)(図15)である。この楼閣は金の南京(開封)より移築された¹⁰⁶⁾もので、もともとは、北宋の徽宗の潜邸にあった熙春閣(図3)であり¹⁰⁷⁾、開封の繁栄を象徴する建造物の一つであった。したがって大安閣は二重の意味で「征服」を象徴しており、上都における王権儀礼の空間としてまことに相応しいものといえよう。

「朝現」のために「夏間」の「青草時月」に上都

に集まる「諸王、妃子、公主、駙馬、各千戸¹⁰⁸⁾」は、このような儀礼にも参加したのであろう。現在のモンゴルでも夏は「民族の祭典」であるナーダムが行われる重要な季節である(国家ナーダムは7月11~13日に実施)。上都での日々は元朝皇帝からすると、モンゴルの統合をはかるための行事が輻輳する重要な時間だったのではないだろうか。以上のように、大安閣を中心とした上都の都城空間とそこで行われる儀礼には、草原の人々に王権を可視化するための存在意義があったのである。「洒馬妳子」や、クリルタイ、大ハーンの即位式など、大都では行われないう重要な国家的行事も実施されており、上都は、京師と漢文文献で記されている大都に匹敵する政治空間としての意味を持っていたようである。

むすび

都城空間とは儀礼を行うことで王権を発生させるための象徴的空間である。したがって、王朝交代などの際に前代の都城を破壊したり、大改造を施すということが行われるのであろう。隋の文帝は南朝陳を滅ぼし建康を破壊した。唐太宗は隋の大興城のシンメトリーな都城空間を崩し大明宮を中心とする都城を計画した。朱全忠が唐長安城を取り壊し、「丘墟」とした。海陵王は上京会寧府を徹底的に破壊し、中都大興府への遷都をおこなう。これらの都城空間の「破壊」は、政変とリンクさせたものである。したがって、大元ウルスが、南宋臨安の郊壇を破壊したことは、王権のシンボルを打ち砕くということであり、中国征服の完成を象徴する重大な事件として注目すべき出来事であろう。

この破壊を指導したのがチベット仏教僧であったことも興味深い。大元ウルスは儒教式の王権儀礼をあまり重要視せず、シャーマニズムやチベット仏教にもとづく王権儀礼を重んじていたからである。

この事件とほぼ同時期に、上都開平府には、大安閣が建設されている。大安閣は元々北宋開封にあった建造物(熙春閣)であり、徽宗が上皇となったときに居住していた竜徳宮(道観)に建てられていたものである。金朝時代も記念碑的建造物であり、開封(金の南京)を通過して中都に向かう使節団に感動を与え続けた。それを移築して、上都の正殿とした。大ハーンが即位儀礼を行う空間となった。これも前朝の都城施設を破壊し王権交代を可視化する行為といえよう。

徽宗朝では前半は儒教思想によって、後半は道教によって、王権のシンボルが次々と整備されている。その末に仏教迫害(廃仏)が行われた。熙春閣があ

った竜徳宮は道観として用いられていた。上都に移築され移築され大安閣と改名されたこの楼阁には「釈迦牟尼仏」が奉安され¹⁰⁹⁾、仏教儀礼が行われるようになった。これは、北宋と大元ウルスの王権論を比較する意味で注目される出来事といえる。

大都の都城空間は郊祀を行うためにプランニングされていた。宮城から皇城の正南門を通り、外郭城の正南門を通過して南郊壇に向かう中軸線街路を中心とする都市計画である。宋代からは中軸線街路に千歩廊が付加された。大元ウルスは大都をこのような平面プランの都城として建設した。しかし、南宋の郊壇を破壊したものの、大都で郊祀を積極的に進めなかったことを本稿では紹介してきた。この問題に解答を示すことは難しい。ただしそのヒントとして、同様に郊祀を行わないにも関わらず、中原都城の平面プランを用いた都城が存在する。遼の中京大定府、日本の平城京・平安京、渤海の上京竜泉府などである。君王が南面するという平面プランは比較的普遍的に権力の可視化に通じるものと考えられたのであろう。平城京・平安京あるいは中京大定府の中軸線街路は、外国の使節に見せるための都城空間であった¹¹⁰⁾。大都の造営もそのような目的があったのかもしれない。クビライは大都造営以前から、金の旧都（中都）を根拠地として用いていた。しかし、中都には戦闘による破壊の跡が生々しく残っていた。金代において、南宋使臣は中都を毎年訪れており景観を熟知していた。そのため、南宋使臣ならびに南宋皇帝が訪れる都として大都（北城）を新築する必要があったのではないか。

儒教国家ではない日本・遼・大元の都城では、仏教主義による王権強化が行われている。クビライ政権には、チベット仏教の教団が深く影響を及ぼしていた。そのシンボルとなったので、チベット仏教式の仏塔であり、端門のまえに立てられた「金輪宝」であった。毎年実施された游皇城も仏教にもとづく儀式であり、そこでは、都人が参加し皇帝とのコミュニケーションが演出された。

大元ウルスはハイブリッドな様態をもつ帝国であった。したがって王権をさまざまな方法で演出していた。そのため都城空間を複数持つことになった。大都と上都をハーンは例年往復したが、草原に建設された上都開平府ではクリルタイやシャーマニズムによる王権儀礼が行われた。大都では儒教国家の都城プランに基づいた巨大な都城を建設し、太廟や社稷・南郊壇なども建設している。ただし、皇帝親祭による南郊儀礼は、1330年まで行われていない。皇城内には、モンゴル帝国のオールドの伝統が反映して

おり緑地であったという福田氏らの見解は大都のもつ空間構造の解析にとって重要な論点である。一方、皇城と外城の間には各省の官庁や太廟社稷、仏教寺院などが配置された。この空間は中国の都城文化の空間なのである。千歩廊が大都で、皇城外に飛び出している問題もこのように考えることによって理解可能である。

おなじく遊牧民族が造営した、遼の中京も皇城部分が空白である。そして、千歩廊の位置も外城部分にある。このような両都市の構造的な類似性を本稿は指摘した。残念ながら大都建築の際に遼中京が参考にされた証拠はないが、遊牧民の生活文化と中国式都城の融合型として、同一の構造になったと考えられる。

遼元の両都城で、それぞれ外城空間に仏教寺院が建設され、王権と深く結びついていたことも、共通点としてあげられる。それは、遊牧民族が複数の民族を征服した複合国家の都城であることによる共通性であろう。回字型の多重城郭構造を巧みに利用して、都城空間の内部に複数の文明を内包したのである。そこが、「一君万民」「与民同楽」という政治文化を可視化する都城空間となった北宋開封や、それに倣おうとした海陵王によって建設された金の中都との違いである¹¹¹⁾。

本稿は、王権儀礼を中心に大都・上都の位置について考えてきた。したがって、比較を通じての都城構造の分析には及ぶことはできなかった。近年は大都形成史における金の中都（南城）の意義が注目されている¹¹²⁾。元朝を通じて中都（大都南城）には、庶民人口が集中していたことも明らかにされている。元朝政府と漢人に広い信者を得ていた道教との関係にも注目しながら、大都の空間について再考する必要があるように思われる。このような論点を用いて、大都の多面的な都城空間については別稿を用意してみたい。

（注）

- 1) 遼の都城については〔久保田 2017〕、金の都城については〔久保田 2018 a〕を参照。
- 2) 〔塚本 2016〕 327—329 頁
- 3) 『遼史』巻 4、太宗本紀、大同元年三月壬寅、中華書局 1974、60-1 頁。
- 4) 〔中國社會科學院考古研究所内蒙古第二工作隊 内蒙古文物研究所 2017〕
- 5) 〔宇野 1988〕を参照。
- 6) 『五代會要』巻1、雜錄、上海古籍出版社1978、9 頁を参照。〔久保田2018b〕は、洛陽が五代北宋時

- 代において都城としての地位を失っていく過程について論じる。
- 7) 『遼史』巻 4、太宗本紀、48 頁、會同 3 年 7 月辛卯：晉遣使請行南郊禮、許之。
- 8) [久保田 2017] を参照。
- 9) [久保田 2016] においては、太宗時代に街路の拡張と御廊が設置されたことを論証した。
- 10) 『宋史』巻 113、礼志、賜酺、太宗雍熙元年 12 月の詔、中華書局 1985、2699 頁
- 11) [久保田 2016] を参照。広い御街には車線が設けられており、「中道」は皇帝専用の御道であった。そこを通る鹵簿の行列を描いた絵画が、中国国家博物館所蔵「延祐鹵簿」である（〔陳鵬程 1996〕を参照）。また、遼寧省博物館蔵「鹵簿鐘」は、鐘一面にこの鹵簿が刻み込まれている。
- 12) [久保田 2017]
- 13) [久保田 2016] 17 - 20 頁に御街・御廊と南郊鹵簿について論じた。
- 14) [今井 2005] は、遼の「祭天地」というシャーマニズム儀式についての専論である。
- 15) [谷井 1996] 163-73 頁
- 16) [藤原 2015] 112-3 頁
- 17) [藤原 2015] 213 頁
- 18) [桃崎 2016]
- 19) 延暦 4 年 (785)、延暦 6 年 (787) の事である。二度目は、文徳天皇の斉衡三年 (856 年)。平城京の仏教勢力から離れることが、長岡京・平安京への遷都の理由だとすると、この交野での郊祀は、仏教の王権論から儒教の王権論への移行の試みだったといえるのではないだろうか。
- 20) [佐野 2009] 19 - 23 頁を参照。
- 21) [久保田 2014] 116 - 118 頁参照。
- 22) 『宋史紀事本末』巻 57、二帝北狩、中華書局 1977、599 頁。
- 23) 『靖康要録』巻 15、『叢書集成新編』新文豊出版公司 1985、靖康 2 年正月 26 日、116 冊 780 頁。
- 24) 『金史』巻 28、禮志、南北郊、中華書局 692 頁。
- 25) 中都への遷都と都城空間の問題については [久保田 2018 a] 第二節の諸項を参照。
- 26) 『金史』巻 28、禮志、南北郊、692 頁。
- 27) 『宋史』巻 100、禮志、北郊、2453 頁：政和三年、詔禮制局議方壇制度。是歲、新壇成。初、元豐三年七月、詔改北郊園壇為方丘。六年、命禮部、太常定北郊壇制。…至是、禮制局言：「方壇舊制三成、第一成高三尺、第二成、第三成皆高二尺五寸、上廣八丈、下廣十有六丈。夫園壇既則象於乾、則方壇當效法於坤。…
- 28) 『大金集礼』巻 29、輿服上、輅輦、35 冊 344 頁にも同様な記述がある。
- 29) 『政和五礼新儀』における王権思想の特徴については [小島 1992] を参照。国都と王宮において、時間的空間的な王権のシンボルを整備することによって統治の正当性を主張する王権理論があり、そのような理論（時令論）に基づいて作成されたのが『政和五礼新儀』であるとする。一方で、王者の内面の修養によって官僚機構を巧みに運用するのが朱子学的な理想の王者であり、世界統治の具象的なシンボルの獲得にはあくせくせず、理法に適う政治の実現に励む。以上のように、[小島 1992 470 頁] では対比的に論じられている。都城とは王権を表現する空間であるため、このような新儒学における王権論の変化が都城にどのように関わったのか検証する必要があるだろう。少なくとも、金朝の都城（中都）は計画的な平面プランによって造営されており、前者の王権論に従っていると考えられる。一方、仮の都城という位置づけの臨安は、「統治のシンボル」は未整備であり、後者の範疇に属すると思われるが、朱子学が南宋で主流になるのは、後半のことである。この問題については別稿を用意したい。
- 30) 『政和五礼新儀』巻 84、吉禮（四庫全書）には「太常寺、預于隔季以夏至日、祭皇地祇于方壇。…」とあり、天地分祭を前提として儀礼が定められていたことがわかる。
- 31) [小島 1989] 136 頁。
- 32) [小島 1989] 136 頁。
- 33) 『建炎以来繫年要録』巻 79、紹興 4 年 8 月戊寅、中華書局 1988、1289 頁。[曹家齐 2005] を参照。
- 34) 『大金集礼』「目録」、『叢書集成新編』35 冊 281 頁、によれば、巻 10 は「皇帝夏至日祭方丘。」巻 11 は「皇帝祭皇地祇於方丘（毎年夏至日祭）」という項目である。
- 35) [溝口 1987] 247-8 頁。
- 36) [小島 1989] 134-5 頁。
- 37) 『元史』巻 3、太宗 7 年乙未、34 頁には「城和林、作万安宮」とある。万安宮は翌年完成している。なおカラコルムについての文献史料は [布野 2015] 466 頁に集約されている。
- 38) [白石 2002] 227 頁
- 39) [白石 2002] 215 頁
- 40) [白石 2002] 218 頁
- 41) 『元史』巻 147、張柔傳、3473-4 頁：其臣崔立以汴京降、（張）柔於金帛一無所取、獨入史館、取金實錄并祕府圖書、訪求耆德及燕趙故族十餘家、

- 衛送北歸。
- 42) 『元史』卷 146、耶律楚材傳、3459 頁:楚材又請遣人入城、求孔子後、得五十一代孫元措、奏襲封衍聖公、付以林廟地。命收太常禮樂生、及召名儒梁陟、王萬慶、趙著等、使直釋九經、進講東宮。又率大臣子孫、執經解義、俾知聖人之道。置編修所於燕京、經籍所於平陽、由是文治興焉。
- 43) このときに救出された孔子の 51 代目子孫孔元措らは、礼樂の収集をオゴタイ=ハーンに願って許され、金ではぐくまれた礼樂が保全されたという。〔池内 1991〕 58 頁参照。
- 44) 『元史』卷九、世祖紀、至元十三年、175 頁:三月丁卯、…伯顔入臨安、遣郎中孟祺籍宋太廟四祖殿、景靈宮禮樂器・冊寶、暨郊天儀仗、及祕書省、國子監、國史院、學士院、太常寺圖書祭器樂器等物。(なお南宋の図書・儀礼法物などの北上については、『秘書監志』浙江古籍出版社 1992、100、109 頁なども参照。)
- 45) 〔池内 1991〕 66 頁を参照。
- 46) 〔佐藤 2009〕などを参照。
- 47) 『元史』卷 13、世祖紀、271 頁:至元二十二年春正月庚辰…毀宋郊天臺。桑哥言:「楊輦真加云、會稽有泰寧寺、宋毀之以建寧宗等攢宮。錢唐有龍華寺、宋毀之以為南郊。…」
※〔乙坂 2018〕 141 頁以下には、「郊壇破壊」が、連動して行われた「發陵」とともに論じられており、漢人記録者の立場による論点整理であることが指摘されている。
- 48) 〔池内 1991〕 65 頁による。
- 49) 大都の建設過程については〔布野 2015〕 473 頁以下に詳細に整理されているので参照されたい。
- 50) 〔渡辺 2012〕 16 頁を参照。〔杉山 2004〕 139 頁によると、クビライは政権獲得後、京兆府と六盤山を首都にする可能性があったが、モンゴル帝国の左翼勢力の支援をうけていたため、燕京地区が都城の地に選ばれたとする。
- 51) 〔郭湖生 2003〕 95 頁には、大都が中都のプランに大きな影響を受け、考工記の原則によることになったという見解が述べられている。
- 52) 〔布野 2015〕 496 頁では、宮城が南に偏在した問題について、「水」の位置が問題であるとする。漕運や給水の機能に基づいて指摘しており傾聴すべき論点である。本稿は、中都の皇城プランを踏襲するため、「太液池」を西苑として取り込む目的で、皇城の位置が考えられたのではないかと論じており、若干論点がことなる。
- 53) 〔杉山 2004〕 142 頁は大都皇城の中央部に「巨大な湖水、緑地が建設の当初から設定されていること」は類例がないと述べるが、金の中都の皇城はそのような形態であり、大都の皇城はこれを模倣したのである。古来「太液池」という名称の池は、漢の長安城上林苑に穿たれた。唐の大明宮の後苑にも太液池がもうけられており、宮殿の後苑に大きな池塘を配するのは中国都城の伝統なのである。
- 54) 「宦迹図」については、〔林梅村 2011〕を参照。
- 55) 〔沈悦・下村・熊谷 2000〕 436 頁。
- 56) 高士奇『金鰲退食筆記』卷上、『叢書集成新編』96 冊 770 頁。には、「其所疊石巉巖森聳金元故物也。或云本宋良嶽之石、金人載此石、自汴至燕。每石一、准粮若干。俗呼為折粮石。」とある。
- 57) 〔杉山 2004〕 139 頁、〔田中 1999〕 33 頁など。
- 58) 藤原京は、『周礼・考工記』に基づいて造られたが、長安城が中軸線街路を持つ都城であったことが 702 - 4 年の大宝次遣唐使の入唐によって判明したため、わずかに 10 年で平城京に移ったという日本都城史研究の学説がある(〔金子 2007〕 27 頁、〔小澤 2008〕 82-3 頁「藤原京の構造的限界」を参照。)
- 59) 〔佐川 2016〕 100 - 101 頁を参照。
- 60) 唐後半期において南郊儀礼が皇帝・官僚に加えて民間とも結びついた行事に変化し〔妹尾 1992・24-6 頁〕、北宋開封において、国都の住民の社会統合をはかる儀式に変化していった〔梅原 1986〕。金中都については拙稿〔久保田 2018 a〕にて考察した。
- 61) 〔渡邊秀一 1995〕 37・39 頁。
- 62) 〔福田 2004〕 46 頁、〔福田 2013〕 218 頁では、テントが元朝を通じて廃れることなく、大都皇城の内部で使い続けられたことが指摘されている。
- 63) 〔杉山 2004〕 152-3 頁。
- 64) 〔福田 2004〕 58 頁によると、皇城はモンゴル人が持つ空間構成の原則や制度・習慣にもとづいて作り出された空間だったという。
- 65) 愛宕松男訳注『東方見聞録』東洋文庫、1970、202 頁。マルコポーロ・ルスティケッロ・ダ・ビーサ・高田英樹訳『世界の記・東方見聞録対校訳』名古屋大学出版会 2012、192 頁(フランクーイタリア語版)、194 頁(ラムージョ版イタリア語集成本)
- 66) 前掲『世界の記』195 頁。
- 67) 『日下旧聞考』卷 30、北京古籍出版社 2001、437 頁。世祖建大内、移沙漠莎草於丹墀。示子孫無忘草地也。(玉山雅集)

- 68) [杉山 1996] 36 頁。
- 69) [渡辺 2010] [渡辺 2017 第 3 章] は中央官庁の配置を詳述するが、皇城内に官庁が存在しないことは問題にしていない。
- 70) [久保田 2017] を参照。
- 71) 『元史』巻 72、祭祀志、1781 頁。
- 72) 『元史』巻 72、祭祀志、1791 頁。
- 73) 『元史』巻 21、成宗紀、大徳 9 年 7 月辛亥、464 頁には、「築郊壇於麗正・文明門之南丙位、設郊祀署。」とある。
- 74) 『元史』巻 72、祭祀志、1781 頁。
- 75) 『元史』巻 72 祭祀志、郊祀上 1792 頁、(至順元年、1330) 十月辛酉、始服大裘袞冕、親祀昊天上帝于郊、以太祖配。自世祖混一六合、至文宗凡七世、而南郊親祀之禮始克舉焉、蓋器物儀注至是益加詳慎矣。
- 76) 『元史』巻 41、順帝紀、至正 3 年 10 月己酉、869 頁。
- 77) [布野 2015] 496 頁では、[杉山 1996] の見解を受けついで大都への『周礼』の影響について「見かけは」というべきであるとする見解が述べられており本稿の論旨に近いが、『周礼・考工記』が理想の都城プランの提示である以上、王権儀礼について言及すべきなのである。
- 78) 『元史』巻 6 世祖紀、112 頁：至元 3 年 10 月丁丑。
- 79) [福田 2004] 50 頁
- 80) [池内 1991] 63 頁には、クビライ初期の宗廟祭祀について論じており、クビライ自身は日常生活の中に祖先祭祀の場所を持っていたという見解を述べている。
- 81) [池内 1991] 64 頁。モンゴル帝国とシャーマンの深い関係については、[池内 1991] 50 頁以下を参照。
- 82) [中村 2010] 43 頁。
- 83) [石濱 2002] 234-5 頁
- 84) [石濱 1994] 43 頁
- 85) [石濱 1994] 37 頁には、「金輪」の密教の王権論における意味が詳細に論じられており参考になった。[赤木 2013] 9 - 11 頁には、帰義軍節度使の王権の分析を出発点として、10 世紀の中央アジアでは転輪聖王観に基づく王権という支配装置が普及していったという展望が述べられている。
- 86) 游皇城の仏教的な意義については、[石濱 1994] 38-9 頁を参照。游皇城のルートや与民同楽としての社会的な役割については、[乙坂 2008] を参照。皇帝（ハーン）がどの地点で、游皇城的の行列に
 対面したのかは、[乙坂 2008] 191 - 2 頁に詳述されている。太液池の中島の儀天殿に出御したという。
- 87) [乙坂 2008] 187 頁の「巡行ルート」を参照。
- 88) [中村 2010] 44 頁
- 89) [石濱 2002] 14-15 頁に引用されているパクパ選「王父子が仏塔を建立したことを称えるダンダカという名の文」
- 90) [乙坂 2008] を参照。乙坂論文の副題にある「与民同楽」とは北宋の開封おこなわれた上元観灯におけるスローガンである。残念ながら乙坂氏は開封や臨安で行われた上元観灯との関係については言及していない。その関係性を比較都城史の可能性として論じる必要を感じている。
- 91) [久保田 2016] などの拙稿を参照。
- 92) 櫺星門は、『東京夢華録』には、金明池の水心殿にいたる橋の南に建てられた門として登場する。
 (『東京夢華録』巻 7「三月一日開金明池瓊林苑」世界書局 1973、189 頁) 後世では孔子廟の南門の名称として普及するが、宋元代においては皇帝の御座所近くの門名として用いられているのである。
- 93) 『周礼注疏』北京大学出版社 2000 年、49 頁には、「正月之吉、始和、布治于邦国都鄙、乃縣治象之灋于象魏、使万民觀治象、挾日而斂之。」とあり、同 50 頁には、「鄭司農云：象魏、闕也者、周公謂之象魏、雉門之外、兩觀闕高魏巍然、孔子謂之觀。」とある。
- 94) 現在でも天安門広場は国家権力の象徴であり、人民英雄記念碑や、毛主席記念堂・人民大会堂・国家博物館などで荘厳されている。[ウー・ホン 2015] は、政治空間としての天安門広場について歴史学的・考現学的な著作である。特に、人民英雄記念碑を巡る 48 頁の記述が本稿の作成において参考となった。
- 95) 本図については[塚本 2018] を参照。
- 96) [久保田 2018 b] は、北宋皇帝の陪都への行幸が減少について論じている。
- 97) [杉山 2004] 145 頁によると、大元ウルスの皇帝は冬季は大都地域にもどりで冬を越していた。その際、大都の城内には入らず、大都東方の柳林の大狩獵地に大天幕群をしつらえて過ごしていたという。[渡辺 2017] 180 頁は、「皇帝は大都に入城したのか」と題する小節によって、この問題に検討を加えまったく入城しなかった訳ではないとする。
- 98) [中村 2010] 49 頁を参照。

- 99) [乙坂 2008] [陳高華・史衛民 1988] 192 頁。
- 100) 『元史』卷 77 祭祀志、國俗舊禮、1924 頁：每歲、駕幸上都、以六月二十四日祭祀、謂之酒馬娘子。用馬一、羯羊八、綵段練絹各九匹、以白羊毛纏若穗者九、貂鼠皮三、命蒙古巫覡及蒙古、漢人秀才達官四員領其事、再拜告天。又呼太祖成吉思御名而祝之、曰：「托天皇帝福蔭、年年祭賽者。」 [池内 1991] 66 頁を参照。また、[今井 2006] はモンゴル帝国の祭天儀礼の詳細を論述しており参考になった。
- 101) [杉山 2005] 309 頁。
- 102) [杉山 2005] 346 頁。
- 103) [杉山 2005] 350—351 頁。
- 104) [陳高華・史衛民 1988] 102 頁、138 頁。
- 105) [陳高華・史衛民 1988] 142 頁。
- 106) [陳高華・史衛民 1988] 101 頁。
- 107) 周伯琦『近光集』卷 1、『四庫全書』集部には「大安閣故宋汴熙春閣也。遷建上京。」とある。熙春閣の建築様式などは [馮恩学 2008] に詳しい。
- 108) 『通制条格』卷 8、儀制、朝現、中華書局 2001、335 頁、延祐元年（1314）六月二十二日、中書省奏：在先諸王、妃子、公主、駙馬、各千戶每朝現的、並不揀甚麼勾當呵、夏間趁青草時月來上都有來。如今推稱緣故不商量了入大都去的多有、依先體例休教入大都去、不揀有甚麼奏的並朝現來的勾當呵、夏間來上都者。端的有忙勾當呵、差使臣呵、怎生？奏呵、那般者。闊闊出、阿撒罕等必闊赤根底、完者、闊闊出等扎撒孫每根底說了、教省會與各枝兒者。么道聖旨了也。欽此。これによると、「夏間」「青草時月」に合わせて上都に来ることが決められた。これは先例に依ったものだったという。
- 109) 梅屋念常『佛祖歴代通載』22 卷、大正新修大藏經 2036-726 頁：膽巴金剛上師には、「甲午四月、成宗皇帝踐祚。遣使召師。師至慶賀畢。奏曰「昔成吉思皇帝有國之日、疆土未廣。尚不徵僧道稅糧。今日四海混同萬邦入貢、豈因微利而棄成規。倘錫其賦、則身安志專。庶可勤修報國。」上曰「師與丞相完澤商議」奏曰「此謀出於中書省官。自非聖裁他議何益。」上良久曰「明日月旦、就大安閣釋迦舍利像前、修設好事。師宜早至。」…」とある。また、『元史』卷 27、英宗本紀、至治元年 5 月丁亥、612 頁には「修佛事于大安閣。」とあり、大安閣にて仏事を行っている。
- 110) 日本の都城空間の目的については [桃崎 2016] 85 頁、「外交の舞台としての朱雀大路」を参照。

遼中京については、[久保田 2017] 20 頁を参照。

111) 金の海陵王が中都を建設した際に上京会寧府を破壊している。おそらくは海陵王が多文化多民族の国家ではない集権国家を目指したからである。海陵王横死後、世宗は会寧府を復活したのは、多文化国家への復帰を考慮してのことなのであろう。

112) [渡辺 2017] など。

参考文献

(和文)

- 赤木崇敏 2013 「金輪聖王から菩薩の人王へ：一〇世紀敦煌の王権と仏教」『歴史の理論と教育』第 139 号
- 池内功 1991 「フビライ朝の祭祀について」『中国史における正統と異端』2 (科学研究費補助金(総合研究 A) 研究成果報告書
- 石濱裕美子 1994 「パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について」『日本西藏学会々報』第 40 号
- 石濱裕美子 2002 「パクパの著作に見るフビライ政権最初期の燕京地域の状況について」『史滴』第 24 号
- 今井秀周 2005 「遼の祭天地について」『東海女子大学紀要』第 25 号
- 今井秀周 2006 「モンゴルの祭天儀式—モンゴル帝国から元朝の間について—」『東海女子大学紀要』第 26 号
- ウー・ホン (巫鴻) 2015 中野美代子監訳・解説、大谷通順訳『北京をつくりなおす—政治空間としての天安門広場』国書刊行会
- 梅原郁 1986 「皇帝・祭祀・国都」中村賢二郎編『歴史の中の都市』ミネルヴァ書房
- 宇野伸浩 1988 「モンゴル帝国のオルド」『東方学』第 76 輯
- 小澤毅 2008 「藤原京の成立と構造をめぐる諸問題」『日文研叢書』第 42 集
- 乙坂智子 2008 「元大都の游皇城—「与民同楽」の都市祭典」今谷明編『王権と都市』思文閣、[乙坂 2017] に再録。
- 乙坂知子 2017 『迎仏鳳儀 元の中国支配とチベット仏教』白帝社
- 久保田和男 2014 「開封廢都と臨安定都をめぐって」『近世東アジア比較都城史の諸相』白帝社
- 久保田和男 2016 「宋代開封における公共空間の形成」『宋代史から考える』汲古書院
- 久保田和男 2017 「遼の中京大定府の建設と空間構

- 造一 11 世紀から 13 世紀における東アジア都城史の可能性『東方学』第 133 輯
- 久保田和男 2018a 「金朝における上京会寧府から中都大定府への遷都と都城空間の変化」『史滴』第 39 号
- 久保田和男 2018b 「五代・北宋における都城洛陽の退場—中国都城史の転換点に寄せて」『東洋史研究』第 76 号第 4 号
- 金子裕之 2007 「飛鳥・藤原京と平城京—七・八世紀の都と舒明王朝」『都城制研究 (1)』奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集 Vol.16
- 小島毅 1989 「郊祀制度の変遷」『東洋文化研究所紀要』108 冊
- 小島毅 1992 「宋代の国家祭祀—『政和五礼新儀』の特徴—」池田温編『中国礼法と日本律令制』東方書店、所収。
- 佐川英治 2016 『中国古代都城の設計と思想 円丘祭祀の歴史的展開』勉誠出版
- 佐藤サアラ 2009 「米内山陶片からみた南宋官窯」『常盤山文庫中国陶磁研究会会報』2 米内山陶片
- 佐野真人 2009 「日本における昊天祭祀の受容」『続日本紀研究』第 379 号
- 白石典之 2002 『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社
- 沈悦・下村彰男・熊谷洋一 2000 「北京市北海公園瓊華島における石組の造景について」『ランドスケープ研究』64(5)、436 頁
- 杉山正明 1996 『モンゴル帝国の興亡』下、講談社
- 杉山正明 2004 『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会
- 杉山正明 2005 『中国の歴史 08 疾駆する草原の征服者』講談社
- 妹尾達彦 1992 「唐長安城の儀礼空間」『東洋文化』72 号
- 田中淡 1999 「元代の都市と建設」『世界美術大全集 東洋編』第 7 巻 小学館
- 谷井俊仁 1996 年 「契丹仏教政治史論」気賀沢保規編『中国仏教石経の研究—房山雲居寺石経を中心に—』京都大学学術出版会。
- 塚本麿充 2016 『北宋絵画史の成立』中央公論美術出版
- 塚本麿充 2018 「徐揚「京師生春詩意図」と重華宮」『国華』第 124 編第 1 冊
- 中村 淳 2010 「モンゴル時代におけるパクパの諸相—大朝国師から大元帝師へ—」『駒沢大学文学部紀要』68
- 福田美穂 2004 「元大都の皇城に見る「モンゴル」的要素の発現」『仏教芸術』272
- 福田美穂 2013 「元大都の皇城における庭園」田中淡・高井たかね編『伝統中国の庭園と生活空間』京都大学人文科学研究所
- 藤原崇人 2015 『契丹仏教史の研究』法蔵館
- 布野修司 2015 『大元都市 中国都城の理念と空間構造』京都大学学術出版会
- 溝口雄三 1987 『儒教史』第六章 新体制の模索と新儒学の台頭 山川出版
- 桃崎有一郎 2016 『平安京はいらなかった』吉川弘文館
- 山内弘一 1983 「北宋時代の郊祀」『史学雑誌』第 92 編第 1 号
- 渡邊秀一 1995 「大都造営と中都」『立命館地理学』第 7 号
- 渡辺健哉 1999 「元代の大都南城について」『集刊東洋学』第 82 号、〔渡辺 2017〕再録
- 渡辺健哉 2010 「元の大都における中央官庁の建設について」『九州大学東洋史論集』38、〔渡辺 2017〕再録
- 渡辺健哉 2012 「金の中都から元の大都へ」『中国—社会と文化』第 27 号
- 渡辺健哉 2017 『元大都形成史の研究—首都北京の原型』東北大学出版会

(中文)

- 曹家齊 2005 「"愛元祐"与"遵嘉祐" --对南宋政治指归的一点考察」學術研究 2005 年第 11 期
- 陳高華 1982 『元大都』北京出版社 (佐竹靖彦訳『元の大都』中公新書、1984)
- 陳高華・史衛民 1988 『元上都』吉林教育出版社
- 陳鵬程 1996 「旧題「大駕鹵簿図卷・中道」研究——“延祐鹵簿”年代考」『故宫博物院院刊』一九九六年〇二期
- 郭湖生 2003 『中華都城』空間出版社
- 郭超 2016 『元大都の規劃与復原』中華書局
- 馮恩学 2008 「北宋熙春閣与元上都大安閣形制考」『边疆考古研究』2008 年第 4 期
- 林梅村 2011 「元大都的凱旋門— 美国納爾遜 阿金斯 藝術博物館藏元人『宦迹図』讀書札記」上海文博論叢 2011 年第 2 期
- 王貴祥 2017 『消逝的輝煌：部分见于史料记载的中国古代建筑复原研究』清華大学美術出版社
- 于杰 于光度 1989 『金中都』北京出版社
- 中国社会科学院考古研究所内蒙古第二工作隊 内蒙古文物研究所 2017 「内蒙古巴林左旗遼上京宮城東門遺址發掘簡報」『考古』2017 年第 6 期 (総 597 期)